

特集 コンピュータとネットワーク時代の社会科学

解 題

ジュマリ・アラム

ここで「コンピュータとネットワーク」と称しているのは一義的には、コンピュータのハードウェアとソフトウェアの科学・技術、およびそれを基礎に应用されている、インターネットによって代表されるようなコンピュータ・ネットワークのことである。こうした意味のコンピュータとネットワークが世界または日本において目覚ましい普及を遂げたのはごく最近だが、たとえば日本国内におけるパーソナルコンピュータの世帯別保有率およびインターネット接続環境の世帯別普及率は現時点でともに6割を越えていることがわかっており、いまやコンピュータとネットワークの時代を「迎える」というよりは「過ごす」という段階である。

「あっという間に起きた騒ぎが、気づいたときには、生活の一部になっていた」というあっけない出来事のようなのだが、しかしこの出来事が社会科学の研究分野に投げかけた課題は、いまもなお消化しきれず、学問の重点領域の図式を塗り替えるほどのエネルギーで膨張し続けているのではないか。こうした課題とそれに対する学問的な取り組みをここで列挙することはできないが、社会科学的には、次の三つの課題と取り組みが重要な研究ジャンルとして、それぞれのスタンスとアプローチの特徴から区別できると思う。

第一は、コンピュータとネットワークを「物」として、とりわけ経済的な意味と価値をもつ商品として扱う社会科学的なスタンスである。この分野は経済学・経営学的なアプローチを用いた伝統的な研究ジャンルであるだけに、その範囲も広い。だがこうした研究スタンスには、以下の第二と第三にはない特徴として、飛び越えてはならない境界線があり、すなわち研究対象全体から見たコンピュータとネットワークは、常に全体の文脈と直接的な関係（主に文脈内の因果的な関連性）をもつものとして位置づけられるという図式である。コンピュータとネットワーク関連商品の市場動向、ソフトハウスの企業実態、消費者のニーズや意識の変化、マクロの経済・産業構造との関係、などに関する研究の焦点や分析は、常に物としてのコンピュータとネットワークの量や質に直接関係するものである。

第二は、コンピュータとネットワークを「メディア」として、とりわけ社会的な媒体、コミュニケーション、情報の側面から見るという社会科学的なスタンスである。コンピュータとネットワークそのものの実体は、社会において機能を果たして定着した段階で、メディア、コミュニケーション、情報などといった別の実体にあたかも変身し、さらにそこから、個々と社会にまたがる行為、意識、語り・言説、欲望、信念、慣習、型・パターン、構造などという必ずしも目に見えない別の存在や関係を生み出す。そこには、コンピュータとネットワークそのものの量や質に、直接的または逐一還元する必要のない、自律的かつ自己成就的な世界が広がっている。そうした対象を社会的・情報学的なアプローチを用いて研究するジャンルであるが、情報化社会論はその典型と見られる。文脈的に見ればここでは、主に近接性に基づいた拡張的な展開が加わっている。

第三は、コンピュータとネットワークを装置として、とりわけ知的なモデルや仕掛けとして——人間の脳と心のメカニズムという、古今東西の科学者が目指している、より重要な実体を解明するために——役立つ、ある種の「アナロジー」として扱う社会科学的なスタンスである。主に認知科学（認知心理学、認知哲学、認知神経科学を含む）と心理学的なアプローチを取り入れた、人間行為や

社会現象を脳と心に還元する社会科学の研究ジャンルである。基本的には、逐次処理とシンボル操作を得意とする今日までのコンピュータとネットワークの科学・技術は、並列処理とコネクショニズムが大きな役割を果たしているとされる人間の脳とそれをモデル化したニューラルネットワークの間には、大きな隔りがある。さらには、人間の脳と心に関する研究には、コンピュータとネットワークに対応させることが困難な、心的状態・表象、低次機能と高次機能の関係、意識と無意識の関係、心身問題などの課題がある。しかしそれでも、コンピュータとネットワークはこうした研究に対して、また相互に、きっかけ、ヒント、比較の対象を提供するものとなり、またもう一つの側面として、実験やシミュレーションの補助的な道具としての役割をもつ。文脈的にみればここでは、主に類似性に基づいた飛躍的な展開が加わっている。

概してこの三つのスタンスとアプローチは、今日のコンピュータとネットワークに焦点を当てた社会科学的研究の、それぞれ経済学的、社会学的、「心の科学」的な側面として位置づけることができる。本特集に収められた各論文も、これらのうちのどれかに組み込んでいる、またはそれに近いものとして見ることができる。

池元論文は、1960年代の日本のコンピュータ産業が、IBM社をはじめとする競争力の高い外国産の脅威にさらされながらも、国内市場における大きなシェアを確保することに成功したという事実注目し、いかにそれが達成されたのかという問題を投げかけた。超・小型機を求める傾向など、国内のコンピュータに関する需要構造が欧米諸国と異なっており、国産メーカーがそれをうまく開拓したということに重要な要因があるという分析を展開している。

石倉論文は、近年立て続けに起きたパソコンとインターネットのブーム、IT革命、ネットバブル崩壊などによって特徴づけられている、情報化社会をめぐる一連の社会的現象に焦点を当て、そうした現象——その実体がどういうものであるかということより——そのものが、人々によってどのように、素朴かつ理論的に捉えられたり受け止められたり見なされたり語られたり位置づけられたりしているのかということを探求している。それに対する分析を、情報化社会に関する夢と言説およびその変化、そして技術決定論的な説明の可能性、という点から展開している。上記の第二のスタンスのさらなる特徴づけとして、コンピュータとネットワークに関する現象学的なアプローチの可能性を示唆しているともいえる。

高橋論文は、「自伝的記憶の形成過程をライフイベント資料から分析する」という方法論的なアプローチを提案して検証するものであるが、上記の第三のスタンスによる、人間の認知または心のメカニズムをモデル化する試みの一環として見ることができる。とりわけ「記憶」（この場合はエピソード記憶）と「経験」に関する扱いは、これらが人間の心的状態・表象に関する一定のメカニズムから創出されていることを前提として展開されている。また、「自伝」や「思い出」の実際の調査にあたっては、社会学的・社会心理学的に知られている固定化した「既存のパターン」と調査対象から得られた「新たなパターン」の調節や駆け引きのような作業を必要とすることを示唆している点で、心的な装置というものをうかがわせている。

アラム論文は、上記の第三のスタンスの可能性を、その背景的な理論や思想を交えて認知社会学的に考察したものである。すなわちコンピュータ・ネットワークとモデル上のアナロジーまたは類似の関係にある、脳と心の低次レベルを想定したコネクショニズムを、社会学の一つの方法論として位置づける試みである。

なお、個々の論文の内容は、こうした図式に沿って紹介した論点以上に、理論的な方向と深みを展開している。こうした全体の関連性を念頭におきながら、個々の論点を通じて「コンピュータとネットワーク時代の社会科学」という研究テーマの今後の発展に、少しでも貢献できれば幸いである。